第２１８回　「元気に百歳」クラブ「道草」（２月）句会記録

句会前日の２月９日（木）、「明日は関東一円が大雪になるかも知れない」とのテレビ報道が繰り返しありました。雪と言えば、都市では交通機関の渋滞など、トラブルが付きものです。「今日は皆さんが句会に出席して下さるのか」と、朝からやきもきしていました。

句会の当日、新橋ばるーんの教室で、開講時間の午後１時半までの時間、原晶如さんから「ミニ句会をしましょう」との発案があり、季題は「春の雪」で一句を詠む・・・ということになりました。晶如さんを除いた参加者６名は、皆さん「えーっ」と絶句。待ち時間は２０分ほどでしたが、それぞれ一句を詠むことが出来ました。晶如さんのグッドアイディアのお陰で、私たちは楽しい時間を過ごしました。皆さんが詠まれた秀句？は、下述の通りです。

○「幻想の街を再現雪明り」　君塚明峰
○「ひとを待つ心もそぞろ春の雪」　本間傘吉
○「手の平にたちまち融けて春の雪」　原　晶如
○「句会へと行く行くまいか春の雪」　奥田和感
○「春の雪つるりひやりで苦笑ひ」　辻　柴楽
○「春雪に戯(たはぶ)るる子ら散りにけり」　手嶋錦流
○「降るもよし降らずともよし春の雪」　芦尾白然

皆さんが即興で詠み、句の中に織り込んだ「詩心」が、参加した皆さんにそれぞれ感慨深い趣向を与えたように思います。降雪によって生まれる新しい「白の世界」、あるいは街の幻想的な景。あっという間に手の平の上で融けていく春の雪の儚さ。遊んでいた子供たちが、降り出した雪にそれぞれに駆けだして帰っていく景。雪を心配して句会に行こうか止めようか、悩んでいる姿などなど。２０分の時間がとても有意義に感じ、感動的でした。

さて、本日の句会です。いつものように投句して下さった皆さんは次の方々です。
芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、
金田月草さん、君塚明峰さん、木村栄女さん、高瀬荻女さん、辻　柴楽さん、
手嶋錦流さん、中島憧岳さん、原晶如さん、舩戸清助さん、本間傘吉さん、
森田多佳さん、芦尾白然（１７名）。

お願いした兼題は次の通りです。そして皆さんが選ばれた各々兼題の優秀句と天賞句も下述致します（３月発刊される『クラブだより』（２０２３年春号）に、和感さんが、最近の新しい句会の様子を書いて下さっています。是非ともご一読を）。
今月の兼題・・・兼題１「水温む」。兼題２「蛤」。兼題３「当季雑詠」

兼題１「水温む」
◎『水温み自然が動き人動く』　創風　天２☾２
◎『指先の傷も癒へたり水温む』　傘吉　天１☆10
◎『水温む滲んで大き橋の影』　荻女　天１☾７
◎『釣竿のしなひし重さ水温む』　明峰　☆10
◎『対岸の子どもの声や水温む』　多佳　☾５

兼題２「蛤」
◎『蛤で祝ひし姪も不惑とは』　柴楽　天１☾５
◎『はまぐりを輪島の椀にふたつほど』　多佳　☆８

◎『蛤を探る足指九十九里』　憧岳　☆８
◎『不機嫌な蛤沈黙鍋の底』　明峰　☾５
◎『椀の中ゆったり蛤口ひらき』　月草　☾５

兼題３「当季雑詠“春”」
◎『野火猛り草押し倒し駆け抜ける』　多佳　天４☾７
◎『寒明けやただそれだけで胸躍り』　一光　天２☾６
◎『透きとほる風や二月の空を駆く』　白然　天２☾６
◎『米を研ぐ水の硬きや春寒し』　清助　天１☆９
◎『膝つきて水琴窟や梅一番』　荻女　天１☾５
◎『ひらがなの曲線ゆるし春来る』　晶如　天１☾１
◎『鳥帰る朝の静寂の安らぎや』　憧岳　天１☾１

兼題１では、創風さんの句「水温み自然が動き人動く」が、天賞二つを獲得しました。天賞推挙のコメントにあるように「待ちわびた春到来に自然が目覚め人々も胸を張り、自分が生きる目的のために様々な動きを始める。スケールの大きな素晴らしい句」と評価されました。また「春になり自然、人の営みが活発になる様子がよく表現されている」との評もありました。次に傘吉さんの句「指先の傷も癒へたり水温む」が、天賞一つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。上五、中七の「指先の傷」と下五「水温む」の対比です。天賞推挙のコメントのように「水の温みを指先の傷の回復」に繋いだ表現が、最多得票賞の句になりました。

もう一句、荻女さんの句「水温む滲んで大き橋の影」が、天賞一つを獲得しました。橋の影が大きく川面に映じている様の中に、作者は春の到来を見つけられたのでしょう。次に明峰さんの句「釣竿のしなひし重さ水温む」が、天賞は付きませんでしたが、最多得票賞（☆印）を獲得しました。この句は、作者が「魚がかかって釣竿が撓う重さ」に春の喜びを感じた句です。多くの読者が一票を投じ、最多得票賞（☆印）に輝きました。

次に選外の句でしたが、多佳さんの句「対岸の子どもの声や水温む」が、多くの票を獲得しました。対岸の子どもの声が聞こえるほどですから、そんなに大きな川であるとは思われません。その川を挟んで対岸の子どもの声、作者はそこに春を見つけました。

兼題２では、柴楽さんの句「蛤で祝ひし姪も不惑とは」が、天賞一つを獲得しました。ここまで七五三、成人式、卒業式など、蛤の澄まし汁で祝ってきた姪が、今や不惑の年を迎えたとは「光陰矢のごとし」です。この感慨を素直に句にされたのでしょう。温かい句になりました。「川柳？」という声も飛んでいました。次に天賞は付きませんでしたが、多佳さんの句「はまぐりを輪島の椀にふたつほど」が、最多得票賞（☆印）を獲得しました。何かのお祝い事でしょう、輪島の椀に蛤を二つほど入れたという句ですが、この祝い事を喜んでいる作者の気持が伝わってきます。この句も温かい句です。

もう一句、最多得票賞（☆印）を獲得した句があります。憧岳さんの句「蛤を探る足指九十九里」です。この句は九十九里浜での潮干狩り、足指で蛤を探した時の気持を詠まれたのでしょう。共感した読者が、蛤を探した足指に一票を投じました。

この二句は選外の句ですが、多数の得票がありましたのでご披露致します。一つは明峰さんの句「不機嫌な蛤沈黙鍋の中」です。捕らえられ人間に食べられていく蛤の身になった句と言えます。哀感のある句になりました。次に月草さんの句「椀の中ゆったり蛤口ひらき」ですが、この句の中七「ゆったり」は、俳句では「ゆつたり」と書かねばなりません。ついつい見逃してしまう誤りですが、要注意ですね。下五の「口ひらき」については、句会では、ディスカッションがありました。

兼題３では、多佳さんの句「野火猛り草押し倒し駆け抜ける」が、天賞四つを獲得しました。野火という早春の行事を取り上げ、火の勢いを監視し、見守る男のダイナミックな動きを詠まれました。本来、俳句では「一句の中で使う動詞の数は、一つか二つが好ましい」と言われています。この句では複合動詞を入れて、三つの動詞を使われましたが、それがダイナミックな動きを反映し、効果的であったと言えるのではないでしょうか。

次に一光さんの句「寒明けやただそれだけで胸躍り」が、天賞二つを獲得しました。この句は春到来の表現を、中七の「ただそれだけで」に、委ねられたように思います。その質素さと言うか、ストレートなお気持が、評者の共感を得られたのではないでしょうか。次に白然の句「透きとほる風や二月の空を駆く」も、天賞二つを獲得しました。天賞推挙のコメントでいただきましたように「早春のまだ冷たい風の清明さ、空の広さが感じられます。駆けるという言葉の動きが空の広さと春への憧れを感じさせる気持のよい句」と言っていただきました。それが出来て居れば嬉しい限りです。

次に清助さんの句「米を研ぐ水の硬きや春寒し」が、天賞一つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。春とはいえ、未だ寒い時の米研ぐ水の冷たさを「硬き」と表現されました。その感触が読者の評価を受けたと思われます。「水の硬き」が「水の硬さ」では、句は成り立たないのでしょうか。伺いたいところです。次に荻女さんの句「膝つきて水琴窟や梅一輪」が、天賞一つを獲得しました。膝をついて水琴窟の音色の良さを確かめようとする。「自然に上を見ることになったその目に、梅の花が飛び込んできた」という情景でしょうか。水琴窟から聞こえる音色も共に、印象深い句ですね。

次に晶如さんの句「ひらがなの曲線ゆるし春来る」が、天賞一つを獲得しました。天賞推挙のコメントに「ひらがなのやさしさ、あたたかさ、まろやかさ、全てがなだらかで、春の暖かみを感じる。日本語素晴らしい」との礼賛の言葉がありました。作者も同じ気持ではないでしょうか。次に憧岳さんの句「鳥帰る朝の静寂の安らぎや」が、天賞一つを獲得しました。朝の静寂さと鳥たちのこれからの長旅を、対比した句ではないかと思われます。今ある朝の静けさが、鳥たちのこれから命をかけた旅の不気味さを暗示しているようです。句としては下五の処理にもう一工夫あるかも知れません。

傘吉さんと多佳さんが交替しながら、務めて下さる投句一覧表の作成から、選句結果のまとめと言うご労作があるのですが、句会のことも丁寧にまとめて下さっている資料の数々から、参考になることが多いです。句会の中でも、いろいろな意見が出てくるようになりました。句会では、それらを俎上に挙げて討議もできるようになってきました。これからもこの学習タイムを大事に育んでいきたいと思います。先輩諸氏のご指導ご鞭撻、どうぞよろしくお願い申し上げます。

白然記